

共同体が生まれる時

——『エフライムのレヴィ人』におけるアクサの場合——

L'instant d'apparition d'une communauté :
le cas d'Axa dans *Le Léviste d'Éphraïm* de Jean-Jacques Rousseau

前之園 春奈

要 旨

ジャン＝ジャック・ルソーの『エフライムのレヴィ人』は、旧約聖書の『士師記』を下敷きにして書かれている。作品の最後にはアクサという娘が登場するが、このアクサのエピソードはルソーが創作したものである。このアクサの自己犠牲の行為が『社会契約論』における「全面譲渡」の身ぶりと同じであると考えられることから、『エフライムのレヴィ人』を政治的作品として位置づけた読解を試みた。本稿では、ルソーがアクサのエピソードを挿入することによって、「全面譲渡」成立の瞬間の原風景を物語化して読者に呈示していることを明らかにした。

キーワード

『エフライムのレヴィ人』、ルソー、共同体、全面譲渡、憐れみの情

政治と文学の間

1762年5月に刊行された『エミール』は同年6月にパリ高等法院から有罪宣告を受け、その著者であるルソーには逮捕状が出された。その知らせを受けたルソーは逮捕を恐れ直ちにスイスへ向けて出発する。『エフライムのレヴィ人』の大部分は、「馬車のなかの気ばらし」として、その道中に書かれた。この作品は、旧約聖書の『士師記』の19～21章を下敷きとし

ている。妻を殺された男が、その遺体を切断しイスラエルの12の部族に送る。それを見た部族が集結して、非道を犯したベニヤミン族に対する大虐殺を始める。「気ばらし」に取り上げるには陰惨な物語である。『告白』によれば、この主題を選んだのは、旅の途中で逃亡前夜に読んだ『士師記』と、それ以前に知人から送られて読んでいたゲスナーの『田園詩』の翻訳を、旅の途中で思い出したためである。「この二冊の書物の鮮明な思い出が、わたしの心のなかでまざりあった結果、わたしは、『エフライムのレヴィ人』のテーマをゲスナー風にあつかうことによって、この二つを結びつけてみようという気になった¹⁾」とルソーは書いている。『エフライムのレヴィ人』の序文草稿にも次のような記述がある。

わたしは何かの主題に取り組んで、自分の夢をまぎらわそうと考えました。この主題が頭にうかぶや、わたしは自分の目的に十分になっていると思いました。それはわたしがいた状態とそこへ行きたいと思う状態の一種の中間項を提供してくれました。陰鬱な気分になりながらわたしはときどきそれに没頭することができました。つぎにそれをもっと甘美な対象と代えることができました²⁾。

ルソーは、作家としての名誉が危機にさらされ、身柄が拘束されればただでは済まないであろう「人生のもっとも残酷な瞬間³⁾」にあった。彼はこの作品の執筆に集中することで、諸々の苦しみを昇華し忘れるという、心理療法的な効果を得ることを期待していたのかもしれない。実際、レヴィ人にふりかかった災難はルソーが経験した出来事のメタファーとして読むことができる。たとえば、夜中に襲撃されたレヴィ人の姿は、深夜に高等法院判決の知らせを受け取ったルソーの姿に重なる。レヴィ人の妻が夫の身代わりとなって殺されるくぐりなどは、ルソーの著作が焚書にされた事

実を想起させる。妻の身体を十二部族に送りつけるレヴィ人の行為は、著作を出版し広く世に流通させる行為と平行であり、またその行為が共に裁きの対象となっている点にも注目すべきだろう。レヴィ人は、まずは妻殺害の容疑者として裁かれた。『エミール』を出版したルソーに逮捕状が出されたのは冒頭に述べた通りである。このようにルソーの生涯における重大な出来事と関わっているこの作品は、自伝的作品の系譜に含まれるものとして読まれることが多い。

本稿では、こうした先行研究を踏まえつつ、『エフライムのレヴィ人』が政治的作品としての側面も持つことを明らかにしたい。そのために、作品の最後に置かれたアクサのエピソードに特に焦点をあてることにする。このエピソードはルソーの全くの創作であり、旧約聖書には登場しない。アクサのエピソードを含む第四の歌は、先だつ第一から第三までの歌と執筆時期が異なっている。『告白』でルソーは、旅の間に第三の歌まで書きあげ、あとはモチエで仕上げたと書いている。またオノレ・シャンピオン社から出版された『エフライムのレヴィ人』を校訂したフレデリック・S・エジェルダンジェは、ルソーや彼の知人の書簡やメモを参照して、この作品はモンモランシーで構想され、スイスまでの旅の間に第三の歌の半分までが執筆され、1762年の9月に作品が完成されたと考えている⁴⁾。ふたりの証言からすると、アクサのエピソードは他の箇所よりも遅れて、時間をかけて書かれたものであると考えられる。パリでの逮捕状・焚書騒ぎに引き続き、逃亡中の同年6月19日、今度はジュネーヴで『エミール』と、さらに『社会契約論』までもが焚書にされた。このことは少なからず『エフライムのレヴィ人』の内容にも影響を与えたはずである。後述するように、アクサはベニヤミン族の再生に一役買うことになるのだが、彼女の行為は『社会契約論』にある「全面譲渡」の身ぶりであると考えられる。『社会契約論』においては、「全面譲渡」の成立する瞬間についての理

論的説明はあるのだが、その具体的なモデルケースは示されていない。また、『エフライムのレヴィ人』には、『人間不平等起源論』や『社会契約論』で述べられている、自然状態から社会へ移行する際に出現する過渡的な「生まれつつある社会」と思しき描写が見られる。以下本稿では、ルソーはアクサのエピソードを挿入することによって、「全面譲渡」成立の瞬間の原風景を物語化して、読者に呈示しているのではないかという仮説を立て、その妥当性を検証する。

作品の構成

『エフライムのレヴィ人』（以下『レヴィ人』）は『土師記』の最後の3章である19～21章を翻案したものである。四つの歌（chant）で構成され、ルソーはこの作品を「一種の小散文詩」と形容している。最初の二つの歌が『土師記』の19章にあたる。第三の歌は20章、第四の歌は21章にもとづいていて、ルソーが創作したアクサのエピソードは第四の歌の最後に挿入されている。おおまかなあらすじは以下の通りである。

第一の歌では、まずエフライムに住むレヴィ人がベトレヘムでユダの娘と出会い見初めて連れ帰る。ふたりは一緒に暮らし始めるが、娘はあきて実家に帰ってしまう。レヴィ人は娘を諦めきれず実家へ迎えに行く。娘の父親はレヴィ人を歓待し引きとめるが、五日目の夕方レヴィ人は娘を連れて故郷へ出発する。第二の歌では、一行はガバに到着したものの宿が見つからず、広場で寝ようとしていたところにエフライム出身の老人が現われ、彼らに宿を提供する。夜になるとベニヤミン族の男たちがレヴィ人に乱暴しようとして来てその家を取り囲む。老人が身代わりに娘を差し出そうとすると、レヴィ人は妻の腕をつかみ家の外に出す。男たちは一晩中妻を乱暴し、彼女は死んでしまう。レヴィ人は妻の遺体を自宅に運び、そ

れを部族の数である十二に切断しイスラエルの全部族に送りつける。第三の歌では、全部族が集結し、長老たちはレヴィ人になぜこのような恐ろしいことをしたのか尋ねる。レヴィ人は事件について語り、居合わせた全員が復讐を誓う。はじめは劣勢だったもののイスラエル軍が勝利し、ベニヤミン族で生き残ったのは六百人の男のみであった。第四の歌では、ベニヤミン族がいまや存亡の危機にあるのを見てイスラエル軍が憐れに思い、ベニヤミン族と和解する。イスラエル軍は、戦わなかったヤベシギレアデ族を処女以外皆殺しにする。生き残った四百人の娘たちはベニヤミン族に花嫁として与えられた。花嫁がまだ二百人足りない。そこで長老たちはベニヤミン族に、祭りに出かけるシロ族の娘たちから気に入った者を連れ帰るよう勧める。シロの娘たちは抵抗し家へ帰ろうとする。娘たちのなかにアクサがいた。彼女の父親は、ベニヤミン族に娘たちの強奪をすすめた長老たちのひとりだった。父の願いを断れず決心したアクサはベニヤミンの男のものとなる。それを見ていた他の娘たちもいっせいにアクサに倣い、自ら進んで男たちのもとへ行く。イスラエルに平和が訪れる。

エジェルダンジェも指摘するように⁵⁾、前半の二つの歌がレヴィ人夫婦の物語、後半の二つの歌がイスラエルの物語となっていて、ある家とある民族を同じような悲劇が襲うという対置関係にある。

この作品では、いくつもの出来事が反復される。ルソーは作中の登場人物に次々と同一化していくので、反復も少しずつずれて繰り返されてゆく。

たとえば、レヴィ人とその妻は、財産に関する部族の掟により、正式には結婚していない。そのため聖書では妻は側女と表現されている。またレヴィ人は出会った娘をそのまま連れ帰ったが、これは家族にしてみれば娘を拉致されたに等しい。この拉致と正式ではない結婚は、シロの娘たちを襲ったベニヤミンの男たちによって繰り返される。妻を殺されてひとりに

なったレヴィ人の姿と、女子供を皆殺しにされかろうじて生き残ったベニヤミン族の男たちの姿を重ねることもできる。

そしてアクサが反復するのはレヴィ人の妻の犠牲の場面である。襲撃を受けたレヴィ人が妻を差し出すと、男たちはたちまち「半死 demi-morte」の娘を取り囲み一晩中弄んだ⁶⁾。一方、父親に説得されたアクサは、彼女もまた「半死 demi-morte」の状態でベニヤミンの男の腕にくずれ落ちる⁷⁾。ただし、レヴィ人の妻は選択の余地なく一方的に悪人たちの手に引き渡され、あげく死に至ったのに対し、アクサは自ら決断して己が身を犠牲にしたが、死にはしなかったことは注意しなければならない。『士師記』にはアクサのエピソードはなく、シロの娘たちも有無を言わさず連れ去られてしまう。犠牲者を引き渡す場面としては、留保なく娘たちが奪われていく聖書そのままのあらすじの方が、より正確なレヴィ人の妻の反復となったはずである。アクサのエピソードを加えることで、ルソーがあえて反復をずらしたのはなぜなのだろうか。

アクサのエピソード

ベニヤミン族がシロの娘を攫う場面について、『士師記』では次のように書かれている。

彼らは踊っている女たちを奪い、その中から自分たちの数だけ連れ去って、自分の嗣業の地に帰り、町を築き、そこに住んだ。イスラエルの人々もそのときそこを去り、それぞれ自分の部族、自分の氏族のもとに帰って行った。そこからそれぞれ自分の嗣業の地に向かって出ていった。

そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれ自分の目に正しいとすることを 행っていた⁸⁾。

これは『士師記』最終章である21章の最後の部分にあたる。ベニヤミン族がシロの娘たちを略奪したことは「自分の目に正しいとすること」であったのだろうか。王不在の無法状態で各人が「自分の目に正しいこと」を行い続ければどういう事態になるだろうか。『士師記』の最後はあらたな争いが起こることを予言しているようである。

一方、『レヴィ人』では、この場面はかなり脚色されている。娘たちは一度囚われたものの、彼女ら自身の抵抗の激しさと父親たちの猛烈な怒りのために、彼女たちはいったん解放される。そして議会は、娘たちの運命は彼女ら自身に決めさせることにする。喜んで家に帰ろうとする娘たちのなかにアクサがいた。アクサにはエルマサンという婚約者がいた。彼のもとに駆け寄ろうとするアクサの前に彼女の父親が現われる。この父親こそ、ベニヤミンの男たちにシロの娘を連れ帰るよう勧めた長老のひとりであった。年老いた父親はアクサの手を取り、イスラエルの民の救済と父親の名誉のために務めを果たすよう懇願する。

アクサはうなだれ、答えもなく吐息をついた。しかしやっと目を上げると、尊敬すべき父の眼に出会った。その目は口より雄弁であった。彼女は心を決めた。彼女の弱くうち震えた声が、弱い最後の別れの言葉のなかで、エルマサンの名を発するや否や、彼女は目をくれもせず、たちまち背を向け半死の状態でベニヤミン人の腕にくずれ落ちた。

一同にざわめきが起こった。しかしエルマサンはまえに進み出て、手で合図をした。それから声をあげて彼女に言った。おお、アクサよ、わたしの厳粛な誓いを聞いておくれ。わたしはお前のものになれないからには、他のどの女のものにもけっしてなることはないだろう。わたしは純潔と愛に飾られた、私たちの青春の思い出だけで十

分。一度として刃が私の頭をよぎったことはありません。一度として葡萄酒が私の唇をぬらしたことはありません。生ける神に仕える司祭のみなさん、私は神への奉仕に身を捧げます。主のナザレ人を受け入れて下さい。

たちまち、まるでその場で靈感にかかったかのように、娘たちはこぞってアクサの例にならい、身を犠牲にした。彼女たちは初恋を棄て、あとを追ってきたベニヤミン人たちに身をまかせた。この心を揺るがす情景に、人々のなかから歓声があがった。エフライムの処女たちよ、お前たちのおかげで、ベニヤミン族はいまにもよみがえろうとしている。われわれの先祖の神よ、祝福されてあれ。イスラエルにまだ徳があったのだ⁹⁾。

アクサの行為はその場に居合わせた者たちに一種の回心をもたらす。エルマサンは神に誓いを立て、一度は逃げかえろうとしたシロの娘たちも一斉に行動を起こす。人々の怒りは鎮まり歓声すらあがる。異を唱える者は誰もいない。全体が大きな喜びに抱まれる。争いは終結し繰り返されることはないだろう。アクサの行為が負の反復を停止させたのだ。

法の不在

『レヴィ人』の第三の歌で、レヴィ人は集まったイスラエルの民を前にして事件の真相を語る。聴衆は一致団結してガバを滅ぼすことを誓う。しかしこの時点で、レヴィ人は報復してくれと頼んだわけではなかった。彼はただ、「正義と思われることを行って下さい」と言うただけであった¹⁰⁾。この言葉は『士師記』最後の一文、「そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれ自分の目に正しいとすることを行っていた」を連想させる。エジェルダンジェはこれと全く同じ文がやはり『士師記』17章に

もあり、「そのころ、イスラエルには王がなく」という記述は18章と19章にもあることを指摘して、これらの言葉が繰り返されるのは無政府状態であったイスラエルに王を据えることが必要だったことを強調しているからだと説明している。これに似た言葉は『レヴィ人』の他の箇所にも見つけることができる。『レヴィ人』の第一の歌にある次の部分も、そのような無政府状態の微妙なバランスの上で成り立っている時代を描写している。

神の上にだれも君臨しなかった自由の日々、法官も裁判官も認めず、だれも己のみを主人とし、自分が良いと思うことは何をしても許される時代があった。その頃イスラエルの民は、野に散らばっており、大きな町はわずかしかなかった。淳良な風俗は法の支配を無用にした。しかしすべての心がひとしく清らかであったわけではなく、悪人たちは美德の加護のもとで、悪徳を罰せられないでいた¹¹⁾。

皆が善良であったわけではなく、表立ってはいないがすでに悪徳が芽生えていた時代。そうはいってもルソーはこの時代を人類の黄金時代としてとらえている。またこれは、『人間不平等起源論』の第二部冒頭に出てくる、自然状態と社会状態の間にあたる時代の描写に非常に近い。そこでルソーは、生まれつつある社会において、法の代わりに機能する復讐という行為について言及している。

社会が始まり、すでに人びとの間にいろいろな関係が設定されると、人びとがその原初の構成から受け継いだ性質とはちがった性質が彼らの内に要求されたということ、道徳が人間の行為のなかに導入され始め、法律の存在以前では各人がその受けた侮辱にたいする唯一の審判者であり復讐者であったので、純粹の自然状態にふさわしい善は

もはや新しく生まれたばかりの社会には適応しなくなっていたということ、侮辱する機会がますます頻繁になっていくにつれて罰はいよいよ厳しくならずにはいかなかったということ、そして復讐の恐怖が法律による歯止めの代わりになったということ、などを注意しなければならない¹²⁾。

このように原初の自然状態からは遠いところに来てしまっているにもかかわらず、それでもルソーはこの時代を「もっとも幸福でもっとも永続的な時期」であったと言う。そして「なにかのいまわしい偶然によらないかぎり」この状態を離れるはずはなく、「この状態がもっとも革命の起こりにくい、人間にとって最良の状態」であったと主張する¹³⁾。レヴィ人の訴えによって、イスラエルの民の間に復讐の誓いがたてられたが、法のなかったこの時代にあって、まさに復讐が「法による歯止めの代わり」となっており、復讐は一種の法として機能している。しかし復讐は憎悪を生み、暴力が永遠に繰り返されることになってしまう。それを停止させたのはアクサの行為だった。アクサの行為が場の空気を一変させた。彼女がベニヤミンの男の腕のなかに崩れ落ちた「その瞬間」、 「すべての」娘たちがベニヤミンの男たちのもとへ行く決意をした。この時「全面譲渡」が遂行されたのである。

全 面 譲 渡

ルソーは『人間不平等起源論』において、自然状態から社会状態への推移について、次の様な仮説をたてている。自然状態では人間はばらばらに生きていて他人との交渉はほとんどなかった。したがって彼らの間で利害の衝突が起こることもなく、それぞれが自立した自由な存在だった。集団で暮らし始めると所有の観念が芽生え社会的不平等が生まれた。すると人

間は何らかの服従関係に拘束されるようになり、もはやかつて持っていた自然的自由を維持できなくなった。このような状態を、ルソーは『社会契約論』でこのように書いている。

人々は、自然状態において生存することを妨げるもろもろの障害が、その抵抗力によって、各個人が自然状態にとどまろうとして用いる力に打ちかつに至る点にまで到達した、と。そのときには、この原始状態はもはや存続しえなくなる。そして人類は、もしも生存の仕方を変えなければ、亡びるであろう¹⁴⁾。

このためには、各人の自由が保障されるような契約が必要となる。それが「全面譲渡」である。以下はその説明である。

われわれの各々は、身体とすべての力を共同のものとして一般意志の最高の指導の下におく。そしてわれわれは各構成員を、全体の不可分の一部として、ひとまとめとして受け取る。

この結合行為は、直ちに、各契約者の特殊な自己に代わって、一つの精神的で集団的な団体をつくり出す。その団体は集会における投票者と同数の構成員からなる。それは、この同じ行為から、その統一、その共同の自我、その生命およびその意志を受け取る¹⁵⁾。

全面譲渡においては、各構成員はいったん自らの「身体とすべての力」を一般意志に差し出し、その見返りとして共同体が有する集合的自己を分有する。アクサの自己犠牲の場面に戻ろう。彼女は婚約者に別れを告げると、「たちまち背を向け、半死の状態でベニヤミン人の腕にくずれ落ちた (se retournant à l'instant demie-morte, elle tombe dans les bras du Benjamite)」¹⁶⁾

のであった。そしてそれを見て「すべての娘たち」が、直ちに、アクサの行為をまねた。『社会契約論』には「共同体の各構成員の各々は全面譲渡がなされた瞬間に、自己を共同体に与える」¹⁷⁾とある。アクサの行動が契機となり、この時、全面譲渡が行われた。『社会契約論』にはなかった、全面譲渡が成立する瞬間の原風景が、『レヴィ人』ではアクサのエピソードとして描き出されていると考えていいだろう。

アクサの自己犠牲は、レヴィ人の妻の犠牲、ベニヤミン族への報復とそれに続くヤベシギレアデ族の虐殺、そしてシロの娘たちの強奪という負の連鎖に終止符を打ったことになる。

憐みの情と女性の犠牲

アクサの自己犠牲 (= 全面譲渡) は争いを終結させ、一度は存亡の危機に陥ったベニヤミン族を復活させ、イスラエルの民族を再生させた。彼女は父親のために決断した。自分の父親の苦悩をその腫のなかにみとめ、彼女は父親に対する憐みの情にかられて行動したのだ。アクサのしたことは英雄的行為と言っていいだろう。とはいえ、自分の妻を身代わりに敵に差し出したり、娘たちの集団的な誘拐を勧めたり、『レヴィ人』での女性の扱いは酷過ぎるのではないだろうか。聖書を題材としているので、この物語が聖書の世界の道德観に従って書かれているのは理解できる。しかし、アクサのエピソードはルソー自身が考えたものである。

女性による自己犠牲のエピソードは、ルソーの著作のなかに何度か登場する。アクサのエピソードに近いものは『新エロイズ』のジュリとその父親との対決場面である。ヴォルマールとの結婚を断固として拒むジュリに対して、父親は彼女の膝をかき抱き泣きながら説得する。その涙にぬれた眼を見てジュリもまた、アクサの様に（そしてレヴィ人の妻の様に）「半死の状態」父親の腕のなかにくずれおちる。また、『エミール』の5巻で

は「女性たちの喜びや悲しみは国家的な事についてのもっともおごそかな判定として敬意をはらわれていた。そこでは大きな変革はすべて女性から起こった」と書き、四人の女性の例をあげている。そのうちのひとりには貞女として名高い古代ローマのルクレツィアである¹⁸⁾。しかし、なぜ女性が犠牲になるのだろうか。アクサの自己犠牲(=全面譲渡)は、共同体の再生において重要な役割を果たしている。ところが、『社会契約論』の全面譲渡の記述には女性についての言及はない。ルソーは共同体の成立において、女性をどのように位置づけていたのだろうか。この疑問を解き明かすための導きの糸となり得るのが「憐みの情」だと筆者は考える。

ルソーは『人間不平等起源論』で、「憐みの情」は「あらゆる反省に先立つ、自然の純粹な衝動」であると言いつつ、次のように述べている。

他人が苦しんでいるのを見てわれわれが、何の反省もなく助けにゆくのは、この憐みのためである。また、自然状態において、法律、習俗、美德のかわりをするのもこれであり、しかもその声にはだれも逆らおうとしないという長所がある¹⁹⁾。

アクサは父親に対する「憐みの情」につき動かされて自己犠牲を決意したことに留意しなければならないだろう。また同じ所で、ルソーはこのようにも語っている。

一揆や街の喧嘩のとき集まるものは下層民であって、用心深い人はそっと敬遠する。喧嘩を分けて、紳士諸君が殺しあいをしないようにしてやるものは、下等な人種であり、市場の女たちである²⁰⁾。

このルソーの言葉からも、共同体の成立と女性の犠牲について考察する

うえで、ルソーの「憐みの情」の概念をきちんと定義づけることが重要と思われるが、それはまた別の機会に論じることにした。

注

- 1) Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes* I (以下 OC と略), Gallimard, 1959, p. 586, 『告白』下, 桑原武夫訳, 岩波文庫, 1966年, 152頁。
- 2) OC II, 1964, p. 1206, 『ルソー全集』11巻, 松田清訳, 白水社, 1980年, 139頁。
- 3) Ibid., p. 1206, 訳138頁。
- 4) *Le Léviste d'Éphraïme* Edition critique par Frédéric S. Eigeldinger, Honoré Champion, Paris, 1999, p. 29.
- 5) Ibid., p. 55.
- 6) OC II, p. 1214.
- 7) Ibid., p. 1223.
- 8) 『聖書』新共同訳, 日本聖書協会, 420頁。
- 9) OC II, p. 1223.
- 10) OC II, p. 1216.
- 11) Ibid., p. 1208.
- 12) OC III, p. 170, 『人間不平等起源論』本田喜代治・平岡昇訳, 岩波文庫, 1933年, 95頁。
- 13) Ibid., p. 171.
- 14) Ibid., p. 360, 『社会契約論』桑原武夫・前川貞次郎訳, 岩波文庫, 1954年, 28頁。
- 15) Ibid., p. 361, 訳31頁。
- 16) OC II, p. 1223.
- 17) OC III, p. 365, 訳37頁。
- 18) OC IV, 『エミール』今野一雄訳, 岩波文庫, 1964年, 77頁。
- 19) OC III, p. 156, 訳74頁。
- 20) 同上。